

マックス・ビアボーム 作
佐々木徹 訳

『ズリイカ・ドブソン』

(「20世紀イギリス小説個性派セレクション」3)



ジュダス学寮の学寮長の孫娘、そして世間に名高い奇術師のズリイカ・ドブソンがプラットホームに降り立った瞬間こそは、全オックスフォードにとって災厄と破滅の始まりだった。ズリイカは奇術の腕こそパツとしないが、彼女を一目見た男はみんな両目をハート型にしてひれ伏してしまうのだ。これまで孤高のダンディ道に邁進してきたドーセット公爵までが、あっという間に恋の奴隷。ところが当のズリイカは、恋はしたくとも男にひれ伏されるのが大嫌いときている……。

こういう作品で卒論を書きたいなどという学生が現れたら、教師はさぞや困るだろうと思う。ちゃんと書かせれば書かせるほど、卒論の悪質なパロディに近づいてゆくに違いないからだ。オックスフォードを舞台にした学園小説として論じて、男どもを痛快になぎ倒すスーパー・ヒロインのズリイカにフェミニズム的アプローチを試みても、はたまたズリイカに一目惚

れするドーセット公爵のキャラクターを通じてダンディとは何ぞやという文化的問題に迫ろうとしても、芯にあるものがノンセンスと奇想だけに、見当はずれの栃麺棒を振り回してストラック・アウトが関の山である。

かといって、『ズリイカ・ドブソン』のノンセンスと奇想のあり方について生真面目に論じるなどというのは、なお一層の野暮天。ズリイカに惚れる学生たちを見るがいい、非の打ち所なきダンディのドーセット公爵からボンクラの貧乏たれノウクススの果てに至るまで、特大の栃麺棒をぶんぶん振り回したあげくに総員ストラック・アウトの潔さだもの。読者としても、なんじゃこりゃあと面食らい、アホとちゃうかと呆れ果て、しまいにケラケラ笑い出すのが、マックス・ビアボームという分類不可能な異形の才に対する礼儀だろう。

一方で、この小説に漂っている何ともいえない寂寥感についてはどう言ったものか。ユーモアとペーソス、などという月並みのことではない。歓楽極まりて哀情多しとでもいうか、ノンセンスと奇想が贅沢に消尽されつづけるビアボームの書きっぷりそのものが、男どもを従えてズリイカの闊歩するオックスフォードの通りにカラリと乾いた憂愁の翳を投げかけてゆくのだ。諷刺、などという物欲しさとはまるで無縁の境地である。

この小説、オックスフォードというマジカルな土地への讃歌として読めばイーヴリン・ウォーの『ブライズヘッドふたたび』の蕩けるような陶酔ぶりと端を接してもいるし、学園コメディの底に流れる憂愁に目を向ければアントニー・ポウエルの *A Dance to the Music of Time* 十二連作の第一作 *A Question of Upbringing* (1951) とも重なる部分がある。そういえば、*A Question of Upbringing* のオックスフォード・パートには J・

G・クウィギンという陰気でサエなくて小さな野心満々の学生が登場するが、クウィギンの造形に本作のノウクスがかすかな影響を及ぼしている可能性はないだろうか。

しかし、この作品の摩訶不思議なコメディ感覚にいちばんよく通じる芸術作品を求めるならば、それは1940-50年代の英国で制作されたイーリング・コメディ映画だろう。アレック・ギネス以下の悪漢たちがてきぱきと死んでゆく「マダムと泥棒」(1955)もそうだが、日本では「カインド・ハート」という奇妙な題名でDVDが出ている連続殺人コメディ *Kind Hearts and Coronets* (1949) のノンセンスと憂愁は、芸術のジャンルを超えて本作とじかに響きあう。オードリー・ヘプバーンは舞台のズリイカ役を熱望したというが、*Kind Hearts and Coronets* のヒロインを演じるジョーン・グリーンウッドこそはドンピシャのはまり役だったろう。ちなみにグリーンウッドは、ピアボームが尊敬してやまなかったオスカー・ワイルドの「真面目が肝心」の映画版(1952)でグウェンドリンを演じてもいる。(新人物往来社、2010年10月、四六判376頁、2,600円)

——小山 太一 (専修大学准教授)